

現代社会の危機と宗教

荒木 美智雄

はじめに

このところ十年ほど私が、焦点を定めて研究をしているテーマから、戦後五十年の問題を考えてみようと思います。この五十年の歴史を、私も皆さんも主体的に生きてきている。中にはまだ五十歳に達していない方もいらっしゃるだろうと思いますが、その中を通り過ぎてきた。私たちは当事者であって、この五十年をなかなか対象化し、客観化して見ることが出来ない。そこで日本の戦後五十年を直接に考えるのを避け、五十年の問題を第三世

界の方から見直してみようと、考えるのです。

具体的な話を最初に挟んでみましょう。私はこのところ毎年、筑波大学に入学してくる一年生に、「私の宗教観」という題で短いエッセーを書いてもらっています。そうすると、その年ごとの新入生の宗教についての意識が分かります。もちろんジャーナリズムの影響を受けている場合が多いのです。自分自身の宗教についてのものの見方をあまりはっきりもっていない若者が多く見られます。今年(一九九五年)は四月に入学した学生たちが「私は宗教と関係ありません」と書くのが多かった。それは、

オウム真理教についてのジャーナリズムの報道がかなり強く影響していると思われます。そして、よく聞いてみると、友達同士で誰かが宗教と取り組んでいることを知ると、「君、大丈夫?」とか「止めた方がよいのでは?」とか、まるで危険なものを見るような見方で宗教に対応しようとする若者がいる。

そのような意識が、ジャーナリズムの中で流される宗教についての論評によってつくられる。そして、このところジャーナリズムの宗教の扱いはいつもネガティブです。センセーショナルです。これは、ジャーナリズムがどのように日本の宗教とか精神生活とかについて責任をとろうとしているかという問題にかかわっていますが、もっと根本的には、やはり明治以来の百数十年にわたる近代化の中にあつた教育の問題とか、精神世界の問題に關係するのではないかと思うのです。

日本の近代化と世界

それだけではない。私は明治以来の日本社会の近代化と言いましたが、この近代化が起る背景に、西洋を中

心とする世界支配の問題があります。コロンブスがヨーロッパの港を発ったのが一四九二年ですが、一九九二年の年はちょうどコロンブスの大航海から五百年経っています。今年(一九九五年)は五百年になります。その間に展開した西洋の世界支配と、その間に世界支配をとおして形成された西洋の文化とが密接に関係しているところがある。

私はこのところ数回メキシコを訪れています。またメキシコばかりでなくフィリピンとかマレーシアにも行っています。インドネシアや南米にも行きたいと考えています。アフリカにも行きたいのです。どうしてかと言いますと、この五百年の間に、世界中の人がどういうことを体験したかを知りたいのです。それを理解しないと、日本が今日このようにあることの意味が、十分には分からないのではないかと考えるのです。

なぜならば、西洋がこの五百年にわたる世界支配を展開していった、そのプロセスの中に植民地支配ということがあります。まず、征服する論理をたて、征服して、征服したその土地を植民地に変えていく。メキシコやフィリピンはスペインの植民地でした。少し調べてみます

と、フィリピンはスペインの植民地であったメキシコの属国として位置づけられていたのです。そして秀吉の頃、メキシコを出たサンフェリーペ号という船が日本に漂着します。その時に乗っていた宣教師たちは長崎まで歩かせられ、そこで殉教して後に二十六聖人になります。この船はメキシコからフィリピンに向かう途中でした。日本の秀吉の軍隊が朝鮮征伐を行った頃、さらに中国を征服することを考えるなら支援すると、秀吉はキリシタンの宣教師たちからそのかされていた。彼はルソン島まで行くことを考えていたと言われています。よく考えてみるとコロンブスの大航海が始まって間もなく、わずかな十年を経た頃に日本にはそういうことが起こっている。

問題はその頃から今日までに日本に何が起こったか、世界に何が起こったかということであり、それをずっとパラレルに見ていくと、ペリー提督が日本にやって来たのは、ただ偶然にやって来たのではない。ペリー提督が開港を求めてきた。そして続々と西洋の列強が軍艦をもつて日本にやって来る。その頃から、それまで西洋諸国

との間にあった対等の関係が突然そうでなくなるのです。西洋諸国は日本に有利な条件で外交関係をたてようとする。メキシコやフィリピンで起こったこと、中国の阿片戦争のことなどを知らされていた日本全国の領主たち、武士たちは日本をどうやって守るかということに一生懸命になる。植民地化されないようにと心配して本当に脅えていた。そのことを私たちは忘れてはならないと思うのです。

それから問題になったことは、その五百年の間に日本の宗教はどうなったかということであり、世界中の人々の精神生活、それから文化・文明はどうなったかということです。私はこれが全体的に理解されなければならないと考えます。ミルチア・エリアーデは、『世界宗教史』を先史時代から説き起こして、そして、この五百年の少し手前まで書いた時点で亡くなってしまいました。五百年というこの期間に近代西洋の諸々の考え方、文化や文明の概念も、宗教学や政治学や法学などの様々な学問も成立してきた。そして、その学問や制度を取り入れて日本は近代化してきた。言い換えれば、現代の日本のこ

とを理解するには、まず、西洋の成立史が理解されねばならない。さらに、日本における西洋の受容の過程を知らなければならぬ。その西洋を知るには、西洋の非西洋世界との関係がどういうことであつたかということが分かなければならない。そして、中心の問題は宗教の問題にかかわっているのです。特に宗教の概念がどうあったか、宗教の問題が西洋で、そして日本でどうあったかということに関係しているのです。

そのようにして私が研究しているテーマは、エリアーデやジョセフ・キタガワやロングのモデルにしたがつてどんどん広がり、そして、人類の宗教全体を問題にしながら、一つ一つの宗教現象を見ると、そういうスタイルの研究になっています。一つ一つの宗教現象を取り上げる時に、私は人類の宗教経験全体の中にあるものと比較する。そして理解しようとしています。これは、そのような宗教学の先輩たちの学問のスタイルであつたし、そして、そのようなスタイルから発せられる問いを、私の先輩たちは私たちに常に問い掛けてきているのです。

私のスタイルは、一般的にはジェネラリストのスタイル

ルになるのですが、そういう視点から私はこの十年、主に第三世界、主として南の宗教、南北問題で南と呼ばれているところの宗教に研究の中心を置いて取り組んできました。そこでは主として中南米とか、東南アジアが現在の私の研究の対象になっていますが、そういうところを抜きにして戦後の日本の五十年を見るのでは、多くを削り落としてしまうことになると考えます。

生存の条件と宗教

敗戦の時に私は七歳でした。日本は大混乱の中にありました。一番大きな痛手を受けたのは日本人の宗教心であつたと思います。その後、ドラマティックに登場してくる新しい宗教のグループは、創価学会も立正佼成会も霊友会も生長の家も、みんな仏壇とか位牌とか先祖の霊を問題にしました。これは、その時代の日本人の宗教的問題が家族を中心とする人間関係をもう一度打ち立て直すこと、それによって自分の世界とその秩序を立て直すことにかかわっていたと考えられます。

その背後には、民法の改革によって相続のやり方がす

っかり変わったこともあります。人間の絆が壊れていったことはもちろんありますが、国家と伝統の権威が崩壊した後で、もう一度日本人が取り掛かったのは、家族を立て直す、そこから社会全体を立て直そうという運動であったのではないか。それは深い運動であったと思います。その頃の日本の信仰というか、宗教がかかわっていた問題にはもう一つ、飢餓の問題があったと思います。生存ということにみんな一生懸命取り組んでいた。

私は、「第三世界」とか「南」の方に行くと、戦後の日本を思うのです。そこには本当に飢餓がある。そして、この飢餓を何とか克服しようとする人々のところにある宗教を、我々はもう一度本当に理解しないといけないと思うのです。人間の存在の基本的な条件から離れてしまった人々の宗教は、どうしても観念的で抽象的なものになってしまふ傾向が強い。そのようなあり方に、日本の宗教がなりかけているのではないか。私たちは今、宗教に関して第三世界から学ばねばならないとしきりに思われるのです。

ローマン・カトリックのパチカンは、ヨーロッパを捨

てたと言われています。なぜでしょうか。ヨーロッパには精神的な宗教的なエネルギーがなくなったとも言われています。それは新しい世界を創造するエネルギーがなくなったということと等しいかも知れません。そう思いますと、戦後五十年経って、日本が豊かになった時に不気味な宗教が出てきました。不気味なと言うのはどういうことかと言うと、不浄仏霊を説いたり、それからこのように断定すると良くないのですが、平安時代の貴族の宗教のような人間の存在の基本的な条件から切り離された人々の抱くような不安が現れている。しかも、宗教体験を求めようとする人々はたくさんいるのですが、日本の近代教育によって宗教的伝統から隔絶されてきた人々には、どういう仕方でも宗教を求めたいのか分らない。それはおそらく日本の宗教的世界、もしくは精神世界全体がそのような状況を呈しているのではないか。このこと自身が一つの大きな危機である。しかしその場合にも、我々は世界全体と切り離して日本だけで考えないことが大切だと思うのです。

結論を先に言いますと、日本がもし世界で一番豊かな

国になったのであるならば、世界中の問題が日本にやって来ているはずで、一方で飢餓があり、病気があり、環境が破壊され、様々な苦悩を背負っている人々がいて、そして、もう一方でこの「豊かな」生活の中で、世界中に買い物旅行をしながら抽象的に人生の目的を考えたりする人々がいる。しかしながらその人々の実際の生活は、英語では「マーケット・エコノミー」と呼ばれる市場経済の論理とメカニズムに支配されている。そして精神的な内容が著しく枯渇している。そこにある論理では宗教、あるいは人類の多様な宗教的世界が理解できないばかりではない。現代世界の人々の苦悩を理解することが出来ない。そのような危機、どうも具合の悪い危機が日本にきている気がするのです。

あの敗戦後のどさくさの時に、日本が「ユートピア」になること、この日本を立て直して、そして本当に樂園にすることを唱えた、新宗教の群れがあったと考えます。その樂園は到来した。その教祖たちが唱えていたユートピアは到来したと思うのですが、しかし、それは生存の危機を日本の外の社会にまきちらして、日本では生存の

条件が直接的な問題にならない社会が来て、ある意味で樂園が到来していると思うのです。しかし、その樂園は非常に具合の悪い仕方であるのではないかというような状況が見られます。二十一世紀になる前にこれを脱皮しなければならぬだろう、そんな感想を私はもっています。私は、なんとかして日本の五十年を世界の宗教史の中で考えたい、そこから見ると戦後の五十年の日本というものが、もつと広さをもった問題として見えてくるのではないかと考えられるのです。メキシコにまいりまして、フィリピンにまいりまして、社会全体が今にも大きな革命が起こりそうな、矛盾と苦悩に満ちていて、それがエネルギーとなって吹き出していて、そして実際にメキシコでも、フィリピンでも、革命運動のようなものが起きている。

私がこの夏メキシコに行った時にも、大統領府の前には大きなデモがチアパスから押し掛けていました。それからフィリピンにもキリスト教徒とイスラム教徒の間に葛藤があつて、これが革命運動のような様相を呈しているところがあります。どちらの国でも西洋諸国に征服さ

い状況が現実になっているということなのです。

世界の変動と危機

現代世界の急激な変化変動は、戦後五十年の日本の宗教を問題にしようとする場合にも、世俗化とか再聖化ということでききない大きな問題、おそらく人類が未だかつて経験したことのない急激で大きな社会変動、文化が根こそぎ変化していく事態に、日本社会も世界全体も直面している。しかも、その行方を人間は予見予知することが出来ない。そういう危機に人類は直面しているのではない。そのような視点からすれば、世俗化論は生易しい、あまりに安易な世界解釈に導いている。西洋で世俗化が語られる時、この世界は世俗化して、人間は脱呪術化・脱神秘化して、立派な個人が社会に生まれていくという一種のユートピアのイデオロギーが見られると思うのです。私は、それはものすごく楽観的な世界の説明であって、世界の現実を理解するには全く不十分であると、そのように世俗化論を見ています。

しかしこの危機は、直接的な形での危機としては、必ず

れ植民地化されてから、ずっといつも民衆は独立を求めて革命をしてきたのです。それも、いつも宗教的な革命をやってきたのです。このことの意味を私たちは考えなければならぬ。そうしないと日本人は無自覚なままで世界中の人々の精神生活に大変な重荷を押し付けてしまうことになりはしないか。それを日本に生きている人々が自覚していないで、一人よがり世界に経済援助をして貢献していると単純に考えるということになり、もっと悪いことになると思うのです。

メキシコでもフィリピンでも、今ある世界はもうたくさんだという主張を中心の教義にしている宗教がたくさんあります。その最も明白な表現は、「世の終わりが近づいている。それは間もなく来る」。The year two thousand、つまり二〇〇〇年には来るとか、二〇〇五年には来るとか、日にちも時間もはっきりと言う宗教があります。そのような特定された日時に太陽が大爆発をすと言ふ宗教もあります。そのように予言をリーダーが行うという状況は、そのように主張しないと人々の心、宗教心を納得させることが出来ないような耐え難く苦し

ですが、私は特殊だと見る人々の立場にくみするのです。

人類の歴史を私が両手を広げたほどの長さのものだとしますと、西洋の近代の歴史はほんの私の小指にもならない。たかだか十八世紀ぐらいからですから。そうすると小指の太さの五分の一ぐらいにしかならないでしょう。もっと短いかもしれません。人類の歴史というのはそれぐらい広いのですが、その人類の歴史の中で宗教的危機は何度も何度もあったのです。しかし、今日のように世界全体を包み込んで、地球上の人口問題や環境の危機といった大カタストロフに、否応なしにいろいろな文化を巻き込んでいく危機というのは初めてです。そういうことで話を進めさせて頂きたいと思っています。

明治維新以来、日本の社会を特徴づけたものは急激な変化であると明言してもいいと思います。西洋の様々な制度が導入され、大学が出来、西洋の考え方がどんどん取り入れられていく。すべてが変化変動の中に入れられて変容していきます。宗教の事情もどんどん変革を遂げる。そして西洋の近代のモデルを、とりわけ啓蒙主義によって導かれるモデルをモデルにしたものですから、宗

しも先進国の人々には見えないのです。この地球や世界全体を包んだ危機という意味で、極めて宗教的な危機としては明白には見えていない。しかし深刻な宗教的危機が現実にある。そういうことで、私はそういう危機の問題の一部として世俗化の問題を見ようとしています。それは西洋とか日本とか、いわゆる先進国と呼ばれる国の宗教のあり方というものを決めているものであると思うのです。例えば韓国など、かつての東アジアの儒教に根差した国々も、もう世俗化のプロセスに突入してきているだろうと考えられるのですが、しかしながらエリアーデやキタガワが見ていたように、人類の宗教史という、そういう大きな枠組みからしますと、日本の戦後ということも極めて特殊な歴史的なプロセスとして見られてくるのです。日本は戦後、近代化、合理化、西洋化ということを一生涯追求しました。日本の戦後を支えてきた、日本の戦後史全体のモデルは西洋でしたが、その西洋の思想とか文明というのも、人類の宗教史ということからしますと、極めて特殊なものであって、西洋のインテリたちの間には、あれは普遍的だと考える人々もいるの

教が文化の表層や公の場に現れないような文化の構造が日本に出来上がってしまった。それは神道は宗教ではないというような宣言だとか、様々な宗教政策、教育政策と関係があると思いますが、明治から今日までの日本社会は何であったかと問えば、一言で言うならば、近代西洋文明の衝撃の下での急激な変化であったということが言えると思うのです。その最も大きな変革は幕末維新期で、もう一つが、この第二次世界大戦の終わりであったと思うのです。このことを先ほども申しましたように、世界史の、あるいは世界の宗教史の視点から見ますと、コロンブスの航海から五百三年経った現在としての日本が、そこに広がっている、そういうふうにしてとらえた時に広がっている世界、その中の日本の近代の歴史的展開として問題にすることが可能であり、大切であると考えるのです。

近代西洋と宗教の概念

近代西洋と言いますが、近代西洋が成立するのはいつなのかと突き詰めていくと、いろいろな議論があります。

大体、近代西洋が本格的に始まるのは、ルネッサンスの後、啓蒙主義時代であると言われています。しかしながら西洋が西洋になったのはいつかと問うと、そうはつきりはいらない。大体、中世のヨーロッパは、本当に何でもないとどこであつたわけです。蒙古の軍隊が攻めて行くのと、たちどころにみんな降参してしまうような世界でありました。

ところが、その中世というのがまた問題でして、私たちはヨーロッパの中世について何を知っていますかと尋ねられたら、中世は「暗黒時代」だと言うだろうと思うのです。日本の教科書にはずっとそれが書き続けられています。ところが、「中世は暗黒時代である」ということは、ヨーロッパの中学校の教科書にもしっかりと書いてあつて、その受け売りにすぎないのです。ヨーロッパの人たちにも中世が何であつたかは実はよく分からないのです。つまり日本の教育で教えられている情報の内容ばかりでなく、それを考えるいろいろなものの見方が、近代西洋から直接に入ってくる視点をを用いて、考えられているということですから西洋を真似てはいけません。

と、言っているのではないのです。確かに、西洋近代が世界にもたらしたものの中には良いものもいっぱいある。心はもつと広くもつて構えることが大切ですが、しかしながら、その良いものをすべてまとめて横に置いてみると、残ったものに悪いものもいっぱいある。啓蒙主義の思想もすばらしいものを多く含んでいました。しかし、全体的に見れば西洋の植民地支配を正当化することになった、という側面があるのです。だから従来、西洋が世界のただ一つのモデルであると考えていた、あの見方はもう速やかに脱却しないといけないであろう。正當なもの、正しいものはしっかりと受けなければいけないが、一方的な見方は不十分である、と私は考えるのです。

問題は、この五百年の世界の展開を考える時に、西洋が近代西洋として成立してくるようになった、その成立のありようにある。その西洋は実は西洋が非西洋世界と出会い、出会いの文化接触の中で征服や植民地支配のシナリオを作り、征服し、そしてそれをもとにして西洋というものを作っていく。そういう文化接触と支配をとおして出来てきていると考えられるのです。決定的なのは、

先ほども言いましたが宗教の概念なのです。文明の一番古い宗教の形は「フェティシズム」などであると言われた。「アニミズム」、「トートেমイズム」、「マナイズム」などであると言われました。その他いろいろな言葉を西洋人は作ります。それを土台にして人類の宗教の起源はフェティシズムであり、それは最も野蛮な遅れた宗教でもあるとし、一番発達したのが我々の近代の西洋のそれであると言張する。そのような多くの概念の中で突出しているのは「フェティシズム」です。この言葉は、最近、ウィリアム・ピエツという学者が明らかにしたところでは、その起源はコロンブスの大航海より以前の十五世紀後半の西アフリカの、ユダヤ人、アラブ人、土着民そしてイベリア半島からやって来た、ポルトガル人などの人種混雑の商人たちの共同体においてポルトガル人商人が土着の信仰を見て「フェイティッソ」と呼んだことに遡ります。「フェイティッソ」はポルトガル語で偶像崇拜ということです。申すまでもなく、「フェイト」は「造られたもの」を意味し、偶像崇拜はユダヤ・キリスト教で「誤った信仰」を意味している。そして十七世紀に下

イッ人商人の旅行者によって旅行記の中でこれが報じられると、それはヘーゲルの哲学や諸々の哲学、美学、経済学、心理学など、西洋の諸科学の基本的な道具立てとして用いられることになりました。この言葉に典型的に見られるように、西洋の諸科学は、文化の枠を超えて異文化を理解しようとしないう。文化の枠を超えようとする、自らの文化、自らの科学の枠組みそのものを批判しなければならぬのです。

そしてこの見方は、近代の西洋は非西洋の未分化の文化・宗教とは異なつて発達しており、文化が多くの側面に分化していると考ええる。そして、これが西洋近代の通俗概念なのですが、文化と宗教は違う、政治と経済と法律と芸術と宗教、その他の様々なカテゴリーは相異なるカテゴリーとして考えられるべきであると主張されることとなります。そのように分化することが進歩することだ、それは人類の福利に役立つことだと考えてきたのです。これは進歩史観と呼ばれるものですが、この進歩史観は、今日では決して客観的事実と考えられてはならないのです。

つた。分化させられるのは、これはいろいろな学問の体系がバラバラに成立してくるのと軌を一にしている。これは例えば、創価大学もそうであろうと思うのですが、東大も京大も、みんな啓蒙主義の精神を基礎にした西洋の大学をモデルにして出来上がっていますから、いろいろな学部に分かれて、そしてそれぞれの専門家がそれぞれの学部に帰属しているのです。そのような大学の学問的体系の中では、宗教を宗教として全体的に取り扱おうとする学問はずっと遅れて確立するようになります。しかし通常は、西洋の近代主義・啓蒙主義の精神で、バラバラの諸科学のカテゴリーに分解して宗教を「研究」してきているのです。そのようなカテゴリーを全部包み込まないと宗教は理解できないと主張する宗教学の立場は、啓蒙主義の学問体系から遅れて成立しました。そして、「統合的」宗教学、「全体的解釈学」と呼ばれる宗教学の成立によって初めて開かれてくるのです。

これを言い始めたのはルドルフ・オットーであり、ワッハであり、エリアーデなのです。これは、何とか人間の宗教を宗教として全体的に理解しようという、そういう

私は宗教学を勉強していますから分かるのですが、宗教は政治にもかかわる、経済にもかかわる、法律にもかかわる、芸術にもかかわり、人生のあらゆる側面にかかわっています。純粹の宗教というのはありません。すべての側面を抱え込んで、宗教生活があるのです。宗教生活とは何かと問う時には、人間がかかわっているあらゆる側面を、統合的に理解しないと理解できないわけです。

ルーブル博物館に行きますと、大昔からの「美術」が時代順に並んでいます。そして近代が始まる前の美術は神像を中心とした聖なるオブジェであつて、そのほとんどすべてが「宗教芸術」です。それは、まだ宗教と芸術が分化していませんから「宗教芸術」とすら呼ぶべきものではない。西洋の文化史で宗教と芸術（美術）が独立するのはルネッサンスが終わつて以後のことですから、それ以前のオブジェを「宗教芸術」と呼ぶことも誤解に導く、近代主義的解釈であると言わざるを得ない。そして近代が始まると、宗教は徐々に美術の背後に隠れていくのです。これが西洋近代、特に啓蒙主義の考えの影響なのです。それ以前は宗教と芸術は分化していません

う問題意識から出発しました。だから具体的には、そのような問題意識が問題にする近代西洋の諸学問から、世界中の宗教を見ますと、非常に一方的なものの見方になってしまふ。そのような警告や批判から宗教学は始まるのです。「東洋哲学研究所」という言葉にも問題があります。東洋という言葉を作ったのは西洋近代です。東洋という言葉は、西洋近代の自己主張の裏返しとして生まれてくる。今日では、オリエンタリズムという言葉で批判されている諸学問とその方法全体的な問題です。今度は、この東洋の人たちが逆に西洋を見返して、学問をやっていくという、そのような知のあり方が出てくるのですが、要するに、この五百年の間に世界中の様々な概念が作られて、世界中にばらまかれているのです。

また西洋近代の学問は、植民地支配を正当化する傾向が強かったので、その批判は植民地支配を受けた人々の苦悩の中から生まれてきた宗教を正しく理解しようという学問運動に結び付いていきました。また、それから植民地主義の時代が終わった時には、今度は「ポスト植民地主義」の時代なのですが、これを私はマーケット・エ

コノミの時代、市場経済の時代と呼びかえるべきである」と最近、教えられました。問題は、この市場経済の時代に、苦しみながら宗教を何とか生きようとしている人たちのところから、もう一回批判しなおして、世界をもっとバランスの良い正当な理解にもたらさなければならぬということなのです。

フィレンツェという町は、イタリア・ルネッサンスの中心地で、文芸復興で有名なところだ。あの時代、ミケランジェロとか、レオナルド・ダ・ビンチとかいうような人たちは、芸術と宗教と科学といった諸々の文化のジャンル、カテゴリーに分けて考えなかった。あの人たちはすべてが出来た。トータル・マン（全体的人間）、ユニバーサル・マン（普遍的人間）を理想に掲げて、あらゆる事が出来る人間を目指したのです。「芸術」とか「美術」というのも独立したジャンルではなかった。彼らには芸術家という自覚すらなかったのです。そこでは細かい専門分野にのみ通じる専門家というのは、全然評価されなかった。ところが西洋近代になると、あまりに微細に専門分野が分かれていく結果として、細かいと

ころの専門家が支配的になって、全体的人間が生まれるのが大変困難になってしまふ。

先ほど五百年にわたる西洋の世界支配と言いましたが、五百年前のコロンブスの大航海の頃には、西洋の中心はイタリアではなくって、スペインとポルトガルになっていました。西洋世界の中心はさらに、そこからオランダへ、そしてフランス、イギリスという、産業革命を経て北ヨーロッパ中心の世界に移行していくのです。このヨーロッパの歴史の中でスペイン、ポルトガル中心の大西洋世界から、北ヨーロッパ中心の大西洋世界、全世界を包み込む世界の展開に移る過渡期に、イエズス会やフランシスコ派やドミニコ派の人たちが、西洋の世界進出の一つになって日本に來ているわけです。

はじめはカトリックの宣教師が来ていますが、そのうちプロテスタントの宣教師がやって来て、日本は後にオランダと親密になりますが、オランダはプロテスタントの国であって、「鎖国」に踏み切るかどうかという頃、日本は、プロテスタントとカトリックの競争の場でした。それで日本はヨーロッパから遠かったこともあって、植

民地化されないで済みました。この植民地主義の展開は、

一方で産業革命以降の科学技術や資本主義や産業とか、新しく形成された近代国家のイデオロギーの力で世界中に西洋の文明をもたらすことが神の意思に沿うのだ、と考えたのがヨーロッパのクリスチャンだったのです。ですから宣教師と国家権力と産業資本と、それから技術というようなものが、一つに丸抱えになって、世界に出ていったわけです。

私の先生のジョセフ・キタガワは聖公会の人でしたが、これは本当に良くなかったんだと言います。あれで世界がメチャメチャになったと、こういうふうに言っています。エリアーデは、この人はルーマニア人でして、イースタン・オーソドックス、東方教会の人ですが、私がメキシコに行く度に私はクリスチャンであることを恥じると言います。日本ではクリスチャンが殺されましたが、メキシコではクリスチャンでない人たちがたくさん殺されたのです。しかし、そのメキシコと日本とは無関係ではなかったということです。

我々にとって世界のことは関係ない、と日本人は考え

がちです。しかしながらそう考えてはならない。これくらいよいよ、世界と密接にかかわり合ってきた日本を考へなくてはならない時代がきていると私は思います。なんとかして我々は、あの植民地支配の中で苦しんだ人々の苦悩を理解しなければならぬ。さらにはポスト植民地主義の市場経済の下で厳しい生存の危機に迫いやられている人々の苦悩や悲しみを理解しなければならぬ。

そうでなければ、現在苦しんでいる人たちのことは分からない。今年の一月に阪神大震災が起こって、算簡の下敷きになった友達が、人間が生きるのに必要なことと必要でないことがある、と考えたと言っています。そして必要でないものは、もう作る必要がない。必要でないものに振り回されて生きることもない。こう考えたと言っているのです。あの時に、私の友人をはじめ多くの日本人は第三世界の人たちと対等に話すことが出来る、私は思いました。日本のように先進国に仲間入りして世界中を搾取している人間はもう駄目だと思っていたのです。

日本は何となく世界の中で浮き上がってしまったている。しかしながら、今日はもう植民地時代が終わって久

しいということをお願い起こして頂きたい。敗戦の年が一
九四五年です。この敗戦の年を中心に、その後から世
界中の西洋諸国の植民地が独立していきました。そして、
ダニエル・ベル、ポウル・テイリッヒなど西洋の一流の
学者たちが、もう西洋中心の進歩の時代は終わったと宣
言しました。これまで西洋中心で文明を進めていくこと
が良いことだと進歩史観で考えてきた時代が、もう終わ
った。進歩のイデオロギーは西洋では消耗し尽くされ、
それが生きているのはかつての植民地の国々、新しい発
展途上の国々においてであって、それはそれぞれの国の
生存のためであると指摘しました。

トウルーマンの開発経済

そして世界はそれから五十年を経たのです。その一九
四五年のすぐ後でなされたハリー・トウルーマン大統領
の声明を、ここで思い起こすことは重要だと思います。
ハリー・トウルーマンが發展途上国の経済開発を提唱し
ました。つまり独立した国々の経済を發展させて、そし
て先進国の市場に巻き込もうということなのです。この

政策は開発経済の政策学として、今、日本の大学にかな
りあります。これを出発させたのはアメリカなのです。
ところが、これがまた、新たな問題を引き起こしてく
ることになる。私は、カール・ポランニーという経済人
類学者が、この市場経済は世界中で困難を引き起こしな
がら、自由を守るための唯一のシステムであると言っ
ているけれども、これはもう破綻を来たしていると指摘し
ているのです。破綻を来たしているところではない、大
きな混乱を急激に導き出しています。私はこれを考える
時に、いま現在世界は一つのそういうシステムの中に巻
き込まれている。経済システムもそうですが、最近は大
ルチメディアという、恐ろしい情報のシステム、ネット
ワークが出来て、これで私たちのお茶の間に世界中の情
報が集められる時代がきている。このシステムはこうい
う情報を操作出来る人と出来ない人とに分けてしまいま
す。操作出来る人は出来ない人を人間扱いしなくなる事
態が起こります。それだけではない。これがまた世界を
変えてしまうことになります。

それによつてどのように世界が変えられるか分かつて

消滅していく文化と人間

いない。誰も予測することが出来ない。その帰結につい
て誰も責任がとれない。誰にも分かつていないような道
具の普及をなぜ私たちは推進せねばならないのでしょうか。
便利だから。便利ということはまた恐ろしいことでも
ある。しかし大きな問題が同時に起こっています。一
つは、今頃世界はグローバル・ビレッジ（地球村）だと
言われることです。世界が一つになってしまつて、交通
網も発達し、情報機関が発達して、そして、世界の隅々
で世界中の人が寄り合っているグローバル・ビレッジ
は、国家の枠を超えた共同体なのです。それは、ある意
味では近代国家というものがオールマイティーでなくな
った。それは過去のものになったことを意味しています
が、そのような時代に、かつての植民地支配が変わつて、
世界を導き、統制している原理が、開発経済の論理であ
り、マーケット・エコノミーそのもののなのです。この展
開がちょうど植民地主義というものが攻撃的であつたよ
うに攻撃的なのです。

今、地球上に言語が五千百あると言われています。し
かし、あと一世代か二世代のうちに、地球上の言語はわ
ずかに百になつてると予測されている。これは一体ど
ういうことか考えなければならぬ。その百のほとんど
はヨーロッパだとか、先進国、それから巨大な民族の言
語なのです。その五千百のうちの九百パーセントは、ア
ジア、アフリカ、太平洋、アメリカ大陸の言語であつて、
残つた一パーセント、わずか一パーセントがヨーロッパ
やその他の先進国の言語なのです。その五千百のうちの
四百はナイジェリアというアフリカ大陸の真ん中の方に
ある国にある。西洋の植民地主義はずっとアフリカ沿岸
地帯に沿つて植民地主義を展開したから、大陸の内部に
は行かなかつたのです。大陸中央に行つたのはずっと遅
くなつてからです。だから、今ではアフリカ研究と言ひ
ますが、大陸内部の研究はずっと遅れているのです。私
の友達のジェイコブ・オルボーナというアフリカ人の宗
教学者は、ヨルバ族の研究をしている人ですが、アフリ

カ宗教の研究なら私に任せてもらいたい、西洋人のアフリカ研究は貧弱で誤解に導くと、こう明言します。そうするとヨーロッパ人の学者が、もう本当に困ってしまうのです。それは長い間、西洋人の学者が内陸に入ることには危険であると考えられ、研究されなかったからでもあります。他にも植民地主義からんでたくさん問題があることが指摘されている。

しかしながらこの四百の言語がナイジェリアに、それからもっと多くがアフリカ全土に、千六百八十二の言語がインドに、そして本当に小さな所ですが、中米には二百六十の言語があるのです。地球上の言語の数が百になるということは、たくさんさんの小さな民族の言語は一世代か二世代のうちになくなってしまふ。ちょうどアイヌの言語を語る人がいなくなったように、生きた言葉でなくなってしまうということなのです。

それは何を意味するのか。それは、それぞれの言葉で表現される人間と人間との関係だとか、人間と神様だとか、聖なるものとかの関係だとか、宗教を中心に言いますと、愛をどのように表現するか、自然に対する感情を

ド、あるいはもしかすると、もっと早いスピードで言語がなくなる。そして、いったん地上から消えてしまふと、二度と元どおりに語られることがないということになる。そこで、開発経済と近代主義的な市場経済がもっている問題についても少し考えてみたいと思います。

市場経済と人間の危機

このマーケット・エコノミーは今も世界中に攻撃的に展開してきていますが、西洋の世界支配というのは、かつての植民地支配の時代においては、世界各地の伝統的文化を西洋型の資本主義的な経済システムに巻き込んできたのであります。戦後各地の植民地が独立し、国家になった時に、これらの諸国は先進国の経済開発の対象になつてしまいます。しかし、経済開発の背後にある哲学的原則が重大問題です。人間は無限の物質的な富を休みなく追求する欲望、より一層多くのものを自分の自由にしたいたいという欲望によって動機づけられた存在であるという考えです。

今、日本のデパートに行くと、人間が食べられるより

どう表現するか、夢をどのように見るかにかかわっている。夢の見方でも言葉が違ふと内容が変わってしまう、と言われる。五千百の人間の生き方があるとしますと、一世代か二世代のうちに、そのうちの五千がなくなってしまう。これは私は本当に嘆かわしい事態だと思います。人類の始まりから今日まで培ってきた言葉や、言葉で表現される文化や、そしてそれぞれの言葉で表現される宗教的な存在の可能性が大きく消えていくことでもありません。宗教学者はこの宇宙に、世界にどのような宗教的あり方があるかという研究をしてきています。これは宗教学の中心問題ですが、多様な宗教的あり方が人類に許されなくなる。その五千百の多様なものがたった百のものになってしまうということでもあるのです。

日本語は微妙な表現が出来ますが、これは英語に翻訳出来ない。英語で夢を見ると、日本語で夢を見るとはまるで違う世界なのです。その言葉がもっている非常に微妙で深い問題が、そのようにして破壊されてしまふことを考えてみて下さい。ちょうど動物や植物や昆虫がこの地球上からどんどん消え去っているのと同じスピー

はるかに多くの食べ物があります。着ることが出来るよりもはるかに多くの着物があります。服があります。しかし、それが一体何を意味するのか考えなければならぬ。インドだけでも、もう人口の大部分が飢餓に苦しんでいる。貧しい人がいっぱいいるのです。しかしながら先進国中心の、富や物質を限りなく追求しようというこのようなアイデアは、アダム・スミス以来普遍的な価値と考えられて、すべての文化や社会を超えているとすら考えられてきました。この考えにしたがえば、人間はどのように豊富に富が与えられようと、決して満足することはない。恐ろしいことに現代の科学技術が市場経済と結び付いて、実際の開発を行う時には、まさにそのような人間のビジョンが浮かび上がっているのです。

例えば現在の企業社会がそのもののなのです。筑波大学の三分の二は理工系です。教官も理工系の専門家たちです。文科系というのは三分の一です。最近、水と環境をテーマに「大学合同シンポジウム」が開催され、私は現代テクノロジーのありよう、科学技術を宗教学の視点から批判しました。企業の世界では、現代はそれぞれの企

業が他の会社に先んじて新製品を生み出して、人々の消費意欲をかきたてなければ会社自体が生き残れないと言われています。マッキントッシュの新しいコンピュータの機械が出ると、もうそれより古いモデルは大きく値段が下がります。

企業は常に新しいモデル・新しい製品で競争しなければならぬ。これは激しいもので、この考え方、やり方はマッキントッシュやIBMだけではなく、鉄鋼から何から何まで技術の世界は全部そうです。このような新製品の競争は新しい技術開発によってなされます。競争によって生み出された他の会社との落差が、富の源泉になることとなります。

しかしそうすると、それは無限の競争であり、無限の欲望であり、限りなく、他の企業を阻害することは言うまでもないことです。しかしながら、そのような無限の富を追求する欲望とか競争を満足させるためには無限の資源が必要であり、これは無限の資源の存在を前提としているわけです。ところが地球上のエネルギーも、あるいは資源も有限であります。しかも人口は、資源でまか

なえる限界を超えて増加し、環境は目に見えて悪化の一端をたどっている。そういう問題と真正面からぶつかっている。それだけで大きな破綻です。しかし、そうであるのに政治も、科学も、抜本的な解決の方向を示していない。

問題はそれだけではない。破綻を来たしていることがたくさんあります。最も深刻な問題、宗教学の立場からしても、あるいは宗教の視点からしても最も危機的な問題は、地球上の多様な伝統が、それは文化や宗教や社会の伝統でもあるのですが、その伝統が豊かに育んできた人間同士の温かい人間関係、あるいは人間と自然との間、人間と宇宙と言ってもいい、人間と宇宙生命と言ってもいい、そういうこととの間の根源的な意味、深い意味に包まれた関係を抽象的な欲望の論理に還元することになつてしまうことを意味します。

悲観的なことを言いますと、この市場経済の考え方を徹底しますと、すべてのものが貨幣価値に換算される。シカゴ大学の有名な経済学者にゲーリー・ベッカーという人がいまして、この人はすべてのものをお金の価値に

換えるのです。あなたはドルに直すと1ドル五十セントにしかありませんと、人間も貨幣価値に換えるとそれだけである、と言うのです。たつたそれだけです。粗大ゴミです。そういうことで今はもっといろいろ問題があります。人間はお金の数値に変えられる。すべての人間的な価値を奪われて、貨幣の量で測られる抽象的な数値によつてすべてが測られていくわけです。

宗教的人間と「質」の問題

そのような考えに對して、私は、宗教も宗教的人間も「質」の問題とかかわっていると考えています。深い愛とか、深い苦しみとか、神の前の絶望とか、喜びとか、そういうことにかかわると思うのですが、そういうことが薄つて平板な抽象的な価値に換算されてしまうということがあります。

今日では臓器移植で人間の臓器が売られる。売られるだけではない、買う。よくよく考えてみると、教育もレクリエーションももちろんのこと売られているし、買われている。このことを考えてみなければならない。つま

り、マーケット・エコノミーというのが、我々が知らない間に我々の回りをがっちり取り囲んでいるのです。ここに、人間が威厳をもつて本当に人間らしく生きられるには、どうしたらいいか、という民衆宗教の問題が出てきます。

人生の目的でさえもがお金で買われることがある。そうした社会では人間がどのようにしたら威厳をもつて生きられるか、改めて向き直つて、私は問わざるを得ないので。明白に分かつていることがあります。それは、人間は根本的にそのような社会では、お互いがお互いに見知らぬもの同士、ストレンジャー同士になる。そうした関係を生きることになるというあり方に運命づけられている。これを、ジンメルという社会学者がいますが、この人の専門の言葉で言われているのです。もう既に我々の前に近代人の自分自身の人間的環境との関係は、自分から遠い人々とより近くなるために、自分と最も近い人々や集団、例えば家族から一層疎遠になるという仕方で行開する。家族の絆はますます崩れていく。例えば最も親密なグループに閉じ込められている時には、その

関係の中で忠実であるということが悲劇的であると同時に、開放的であったが、そこにあった耐えられないような親密の感情の解体が起こっている。このことが示す意味全体は、本当に、この内なる人間関係の中に距離が増大し疎遠になり、外なる人間関係に見られた距離が減少することである。

つまり人間は個人化していくとともに、その関係は抽象的になると言っています。すべてが商品化される時には、個人は互いにますます見知らぬ者同士になっていきます。文化的にも社会的にも近い人々にとっても、市場経済の精神性は個人同士の間に距離をつくることになります。宗教学においては、このこと自体も問題になります。もつと危機的な問題を投げかける事態は、市場経済の交換原理が、人類が大昔から大切に育ててきた豊かで多様な宗教的交換を破壊していくことです。交換というと皆さんは物々交換を思い出されるでしょうが、私がここで言っている交換は、例えば言葉の交換、挨拶を交わすことです。挨拶も出来ない間柄は、もう駄目な関係です。嫌悪感があるか、つまり嫌っているか、何

か悪いことがある時に、挨拶も出来なくなるのです。いい関係であると言葉だけでなく、いろんなものが交換される。

宗教もそうです。人々との間に、人と神との間に、人間と宇宙や自然との間に、生き生きした交換があります。そういうことがあることが宗教が生きていることだと思ふのです。その交換の原則が貨幣経済の原則で塗り込まれ、閉じ込められた時に、宗教は死んでしまうのではないのでしょうか。マルセル・モースの『贈与論』という有名な本がありますが、すべての正常な社会は交換によって成立すると言っています。友好的な社会関係は交換が相互にしっかりと行われていることだと。個人主義的な方向へ近代化が進んでいる西洋の社会で、大昔から人類が大切にしてきた贈与の関係というものを回復することによって、近代化していく西洋の均衡を回復することが出来ると、モースは考えたのです。しかし、その西洋の新しい交換の原理は、帝国主義的に世界を巻き込んでいて、世界中の多様な伝統を崩壊させています。日本もそれに巻き込まれている。宗教は、何とかそのような危

機を克服しなければならぬでしょう。

最近、メキシコシティーでアステカの宗教に関する学術会議がありまして、私はメキシコシティーに行きました。三十人ほどのアステカ関係の専門家がズラッと揃いました。考古学者、歴史学者、植物学者、考古天文学者、文学者とか、いろんな人が集まった。民族学者、人類学者もおりまして、そこに、四人の私のような宗教学者が呼ばれ、各種の発表にコメントを要求されました。私はアステカの宗教については、あまり知らなかったのですが、そこへ行った時に二つのことが大問題になりました。一つはアステカの宗教を理解しようと思うと、アステカの宗教を破壊したスペイン人の征服者たちのことを問題にせざるを得ない。スペイン人はそのような形でしか研究のための資料を残さなかった。しかし、スペイン人が残した資料はスペイン人の視点で作られていますから、この視点を批判しないと、どこまでいってもアステカに到達しないわけです。いつまで経ってもスペイン人の世界に低迷することになる。

そこで私は考えました。第三世界のオリジナルな独自

の宗教的世界を理解しようと思ったら、近代西洋が世界中に出かけて行って、攻撃的な破壊を行った歴史的過程を研究することが要る。その過程をクリティクしなければならぬ。それをやりながらこの第三世界の宗教をそれぞれの視点から理解しなければいけない。これが一つです。

もう一つは、私たち自身の視点を第三世界の立場からクリティクすることです。ある日、私たちはメキシコシティーの南の村に、インディオの、つまり先住民の集落を訪れて、お祭りに使うブルケイというお酒——それは白いビールのような感じのお酒——をそこで一緒に頂いた。その時に、インディオの老女がそのブルケイを作るための儀式、マゲイという「龍舌蘭」から樹液を取る時の儀式をやって見せてくれました。その老女が家の裏庭で私たちに、それでは今からマゲイから樹液をとる時に私がやることをお見せします、と言って、老女が私たちの前でクルリとマゲイの方に向き、「マゲイさん、あなたたちは私たちの家族の一員であります。けれども私たちはお祭りをするためにブルケイを作らなければならな

い。そのために私たちはあなたの命を奪わなければならない。おわびします。許してください」と、ナワトゥル語で祈ったのです。

私はその時に、私たち日本人も大昔から、こうした祈りの感情をもっていたはずだ、どこへ私たちは置き忘れたんだらうかと思った。アステカの伝統ではマゲイというのはお酒を作る時に使います。それから服を作る時、紙を作る時にも使います。いろんな用途があつて、アステカの生活にとっては極めて重要な植物です。その祈りを聞いた時に、日本人が近代化のプロセスでどこかに置き忘れたものを、極めて重要なものを、私は、そこで見たと思ったのです。今もそう思います。そういう感情、マゲイにかけられた祈りを、私たちは私たちの身の回りの自然に対して、身の回りの人間に対してもっているだらうか。ここには、限り無く温かい人間的感情、宗教的な敬意が表現されていると思えました。これが理解されないと世界の重要な問題が理解されないということでもあります。

その後で私たちはプルケイを頂きました。その味に、

その祈りが込められていることが分かります。それによつてアステカの祈りが、その宗教的意味と一緒にプルケイを頂いた人々一同のものになった、と私は思いました。そのような関係を日本の社会の中に、どうしたらもう一度蘇らせることが出来るのか。私はやはり、人類の宗教の歴史の中にある宗教現象に学ばなければならないと思うのです。宗教学者としてもそうだと思うのですが、そういうものを日本人が回復していくには、どうしたらいいか。これは、日本人が忘れてしまった宗教的なあり方を、世界の、とりわけ第三世界の宗教に学んで、人間の諸々の関係の中に取り戻すこと、回復すること以外にないのではないか。そういう努力が、今、大切なのではないでしようか。それなしに二十一世紀の世界は暗い、としきりに思われるのです。

(あらき みちお・筑波大学教授)

(本稿は一九九五年十一月七日に行われた当研究所主催の公開講演会における講演内容に加筆していただいたものです)